心豊かな世代が育つ童話の里づくり 448

―シリーズ― あなたの人権・わたしの人権

『A君とにらめっこ』

森中央小学校　6年生

最近の学校では、様々な事情により外国から来た子とも同じクラスになることがあります。

私が以前通っていた学校にもカナダから来た男の子がいました。

その子「A君」は、一年生の時から、私が転校するまで一緒のクラスでした。しかし、私はA君が誰かと話しているところを一度しか見たことがありませんでした。

最初は、きっと日本語が話せないんだろうと思っていましたが、どうも違っていたようなのです。

一年生の時、私は体育の授業で消しゴムを運動場のどこかに置き忘れるということがありました。

教室での授業が始まった時、私は消しゴムがないことに気が付いたので、隣の席のA君に、

「A君、消しゴムをなくしちゃったから、少しの間貸してくれない？」

と言いました。

言った後に、「あ、A君、日本語がわからないんだ。後ろの人に貸してもらおう」と思い、後ろの人に借りようとした時に、A君がトントンと肩をたたいて、消しゴムを差し出してくれました。

どうやら、日本語がわかるようです。しかし、なぜ話さないのか、私は不思議に思って、

「どうして、しゃべらないの？」

と聞いてみました。すると、A君は悲しそうにうつむいてしまいました。

その日の放課後、なぜA君が話さないのか、担任の先生に聞いてみました。

先生から聞いた話は、一年生の私が想像もしないような内容でした。

A君は幼稚園の時、外国人の子がいることがめずらしかったのか、周りの子どもたちに

「あっ、外国人がしゃべった。」

と、めずらしがられたりからかわれたりして、話すのがこわくなってしまったようです。

そのことを知って、私はA君に

「めずらしくないから、大丈夫だよ。こわくないよ。話すの楽しいよ。」

と、言って元気づけようとしましたが、どんなに言っても口はキュッと結ばれたままでした。

でも、そんなA君も笑うときがありました。

私が友だちとにらめっこをして遊んでいた時、私と友だちの変な顔を見て、A君がアッハッハッとおもしろそうに笑っていました。

それを見てから、私と友だちとA君の三人でよくにらめっこをして遊ぶようになりました。

とても楽しかったことと、A君の笑い顔をはっきりと覚えています。

A君と別れて三年。今どうしているのかなぁと考える時があります。みんなと普通に話せているといいなと思います。

この経験から、私は見た目が違うから、言語が違うからといって、差別したりからかったりしてはいけないと思いました。

将来、この世界が当たり前のように、いろんな国の人といろんな考え方がある人と協力して過ごしていく世界にしていきたいです。

そのために、私は誰かをバカにしたり差別したりせず、いろんな考え方がある人と話し合いを通して認め合っていこうと思います。

すぐにはできないかもしれませんが、そのことを意識して、これからも生活していきたいです。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。

また、みなさんの投稿もお待ちしています。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別性について気づいたことや感じたことを一、二〇〇字程度にまとめて、住所、氏名、連絡先電話番号を記入して（匿名も可）、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人権」までお届けください。